

災害看護学教育における 合同災害訓練参加による看護学生の学び

伊丹 幸子¹, 山崎 さやか¹

¹健康科学大学 看護学部 看護学科

Nursing students' learning as part of Disaster Nursing Education through participation
in joint disaster training

ITAMI Sachiko, YAMAZAKI Sayaka

抄 録

山梨県富士東部地域の大学で、地域の専門職が実施する合同訓練に看護学生が参加したことによる学びを明らかにした。アンケートの自由記述を質的に分析した結果、【救助される側の気持ちの理解と対応】【災害時の対応】【声かけの大切さ】【災害時の看護師の活動】【各組織の連携】【トリアージの方法】【実際の災害の緊迫感の体験と学び】【訓練体験から今後に生かせること】【平時に何をすべきか】を学んでいた。また、アンケートの集計から、看護学生自身の防災意識および防災行動に関する変化が示唆された。

看護学生が合同訓練に参加し得る学びは、被災者の心理特性の理解、災害時の適切な対応に必要なスキルの理解、災害現場の緊迫感の体験、自分自身の防災意識と行動に関する気づきを得ていたことが明らかとなった。

キーワード：災害看護，看護教育，防災意識，防災行動

I. はじめに

山梨県富士東部地域において災害看護学は重要な役割を担っている。山梨県は地理的な特性から、地震や土砂災害、洪水などの自然災害のリスクが高い地域である^{1,2,3}。また、山岳地帯であるため、災害が発生した際には被災地へのアクセスが制限される可能性が高い。2014年の豪雪災害時には山梨県内の孤立する可能性のあった493の集落全てが孤立した⁴。加えて、地域の高齢が進んでいる。2023年の山梨県の高齢化率は31.3%であるが、富士東部地域の12市町村中8市町村では県

の高齢化率を超えているため、被災者の移動が困難になることが予想される⁵。これらのことから、災害発生時には現地で必要な医療・看護活動が実施できる看護師の養成が望まれている。こうした地域特性を踏まえると、災害リスクを正しく認知し、日常から備える力を育成することが極めて重要である。看護師自身がリスク認知を高めることで、災害発生時に適切な判断や優先順位づけが可能となり、被災者支援における迅速かつ安全な対応につながる。したがって、災害看護教育においては、知識や技術の修得だけでなく、地域特性に

基づいたリスク認知の育成を重視する必要がある^{6,7)}。

本学看護学部では、2023年度の4年次の必修科目として災害看護論(15回)、災害看護援助論(15回)が組まれている。研究代表者が科目責任となっている「災害看護援助論」では、我が国における大規模災害と山梨県富士東部地区の災害想定を理解し、発災後の災害サイクルに応じた看護の果たす役割と看護活動の基礎となる知識・技術について学習することを目的としている。授業形式としては、講義、演習、グループワークにより授業目的の達成を目指している。2023年度の授業では、より実践的な知識・技術を養うために、「2023年度緊急消防隊関東ブロック合同訓練(以下、合同訓練)」に参加した。この合同訓練は、緊急消防援助隊の技術の向上及び連携活動能力の強化を図るため複数の都道府県が連携して土砂災害救助訓練等の訓練を行うものである。2023年度は山梨県が当番県となり茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、長野県、静岡県が参加し、参加人数は1000人程度であった。この合同訓練に本学看護学部の学生が参加するのは初めての試みであった。看護学生が合同訓練に参加するにあたり、支援者としての参加は合同訓練の目的上困難であったため、傷病者役として参加することで合意を得た。学生は、傷病者として搬送されたり応急処置を受けたりする体験を通して、被災者・傷病者の立場を理解するとともに、リスク認知や防災意識に対する理解を深めることができると考えた。また、合同訓練への参加による看護教育上の効果に関する先行研究は見当たらず、リスク認知や防災意識の向上にとどまらず、さらなる学びを得られる可能性も考えられた。

そこで本研究では、探索的に合同訓練への参加を通じて看護学生が得た学びを分析し、その教育的効果を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 対象者

2023年度に災害看護援助論を履修する看護学部4年生で研究参加の同意が得られた59名。

2. 合同訓練の内容

合同訓練は、東部・富士五湖地域を震源とした地震の発生に伴う災害及び火山噴火災害を想定して訓練を行った。具体的には、東部・富士五湖地域を震源とするマグニチュード7.2の地震が発生し、建物の倒壊、火災、土砂崩落、道路崩壊等が各地で発生するとともに、富士山北西側・標高1000m付近において小規模な噴火が起り、山麓では避難が必要な住民や観光客が多数発生している状況である。学生は3グループに分かれ、土砂災害現場、多重衝突事故現場、噴火災害現場における傷病者体験を全員が行った。訓練参加機関は、緊急消防援助隊関東ブロック1都8県の都県大隊を始め、陸上自衛隊、山梨警察本部、山梨DMAT等も参加した。本学学生は、傷病者として訓練に参加した。本合同訓練は10年ぶりの実施であり、参加した消防隊および山梨DMATは、東日本大震災や御嶽山噴火等の災害対応経験を有していた。学生は、合同訓練への参加に先立ち、緊急消防援助隊事務局より訓練の意義および進行計画について説明を受けるとともに、各自が演じる傷病名および病状が付与された。学生は、付与された傷病名や病状について事前に学習し、訓練当日は傷病者として想定された状況に即した発言を行うよう依頼された。

3. 調査票の内容

調査票は、災害に対するリスク認知、合同訓練後の防災意識の変化(自由記載)、合同訓練後の災害の備えに対する考え方の変化(自由記載)とした。防災意識は、「災害に対する考え方」として、例えば、自分や家族の場合に当てはめて、災害の被害に遭うことを具体的に想像できるようになったかどうか確認するものである。一方、災害への備えは「災害に対する考え方」として、非常用食料の備蓄や、家族との安否確認方法等の準備である。リスク認知は、住んでいる地域のハザードマップの確認等である。調査票は図1、2に示した。

4. データ集計

2023年10月から11月に災害看護援助論の講義

(全15回)を行い、合同訓練参加前の講義にて自記式質問紙調査を実施した。2023年11月中旬に合同訓練に参加し、その後に自記式質問紙調査を実施した。

5. 分析方法

自由記載については、質的帰納的分析を行った。自由記載の記述を精読し、「合同訓練の参加によって学んだこと」の内容をコード化した。コードは類似性に基づきカテゴリー化した。コード化からカテゴリー化までは2名の研究者で分析を行った。質的帰納的分析の妥当性については公衆衛生看護学の専門家に確認した。数値については統計解析ソフト Stata 18 を用いて単純集計を行った。

6. 倫理的配慮

本研究は健康科学大学倫理審査委員会で審査を受け承認された(第R5-007号)。

対象学生には、研究目的、研究方法、自由意思、個人情報保護、結果の公表について文書と口頭で説明をした。本研究に参加しなくても成績に影響をしないことを説明した。同意書は提出箱を設けて、災害看護援助論の成績判定終了後に確認した。

Ⅲ. 結果

1. 研究の同意が得られた学生の概要

研究対象者の4年生59名(男性12名、女性47名)中、研究の同意が得られた学生は59名(100%)であった。

学籍番号 ()	氏名 ()	事前アンケート
<p>1. 今までの災害看護学および災害看護援助論での講義で得られた学びについて、自由に記載してください。 (自由記載)</p> <p>2. あなたの現在の災害に対するリスク認識について教えてください。</p> <p>2-1. あなたが住んでいる地域は、自然災害(地震、津波、土砂災害、洪水等の災害)に対して安全だと思いますか。一つ選択してください。</p> <p>1) 安全 2) まあ安全 3) わからない 4) やや危険 5) 危険</p> <p>2-2. あなたは住んでいる地域のハザードマップを知っていますか。</p> <p>1) 見て、災害に備えて、身のまわりの災害による危険箇所などを確認している</p> <p>2) 見たことはある</p> <p>3) 言葉は知っているが、見たことはない</p> <p>4) 全く知らない</p> <p>2-3. 住んでいる地域で指定された避難場所を知っていますか</p> <p>1) 知っている 2) 知らない</p> <p>2-4. あなたの家では、災害に備え、普段からどのようなことについて、家族で話し合いをしていますか。 (複数選択可)</p> <p>1) 非常用食料等の保管場所、使用方法</p> <p>2) 避難するタイミング・住んでいる地域の避難場所・避難経路の確認</p> <p>3) 災害時の家族との安否確認・連絡方法</p> <p>4) その他、災害発生時の行動、災害への備え等</p> <p>2-5. あなたが災害に備えていること、現時点ではしていないが、できればしたいと思っていることについて、あてはまるものを次の中から選んでください(複数選択可)</p> <p>1) 家具等の固定 2) 飲料水や食料品の備蓄 3) 携帯トイレ又は凝固剤の備蓄</p> <p>2-6. あなたの家で、災害に備えて準備しているもの、現時点ではアしていないが、できればしたいと思っていることについて、あてはまるものを次の中から選んでください(複数選択可)</p> <p>1) 水 2) 食品 3) 使い捨てカイロ 4) 防災ヘルメット又は防災ずきん 5) 懐中電灯 6) 携帯ラジオ 7) 予備電池・携帯充電器</p> <p>8) マッチ・ろうそく 9) その他 ()</p> <p>2-7. あなたの家での、飲料水や食料品の備蓄について教えてください(飲料水と食料品それぞれ一つずつ)</p> <p>【飲料水の備蓄】</p> <p>1) 準備なし 2) 1~2日分 3) 3日分 4) 4~6日 5) 7日以上</p> <p>【食料品の備蓄】</p> <p>1) 準備なし 2) 1~2日分 3) 3日分 4) 4~6日 5) 7日以上</p> <p>2-8. あなたは、この1年の間に地域で行われた防災訓練に参加したことがありますか</p> <p>1) 参加している。</p> <p>2) 参加したことがない。でも機会があれば参加したい</p> <p>3) 参加したことがない。今後も参加するつもりはない</p>		

図1 合同訓練参加前アンケート

2. 合同訓練によって学んだこと：自由記載の分析結果

自由記載の内容から57のコードと、9つのカテゴリーが抽出された。カテゴリーとコードは表1に示した。以下、カテゴリーを【】、コードを<>と示す。

カテゴリー【救助される側の気持ちの理解と対応】は、7つのコードから構成された。学生は<救助される側の気持ちになって考えられた>ことにより、<慣れない環境でのストレス>を感じ、<どんな時に不安を感じるのかと考えることができた>と考えていた。

カテゴリー【災害時の対応】は、12のコードから構成された。<短時間の中でしっかりと被災者や現場を見て、適切な対応をすることが大切>であり、そのために<伝えられた情報を繰り返し確認する>こと、<一つひとつの動作を確認して、コミュニケーションをとること>の必要性を理解していた。

カテゴリー【声かけの大切さ】は、4つのコードから構成された。学生は、<不安な思いを抱いている被災者にとって、声かけはとてもうれしいものだと体験できた>と感じており、<端的でわかりやすい言葉で傷病者に声かけをする>という具体的な学びを得ていた。

カテゴリー【災害時の看護師の活動】は、3つのコードから構成された。学生は、<安心させるための訴えの受容や適切なケア>を学び、<災害時の看護について、イメージを持つことができた>と考えていた。

カテゴリー【各組織の連携】は、7つのコードから構成された。<消防や医療機関等との円滑な連携体制>をとり、<情報共有していくことの大切さ>を学んでいた。

カテゴリー【トリアージの方法】は、7つのコードから構成された。<トリアージの仕方を学んだ>こと、<トリアージタグの書き方を学べた>こと、<トリアージタグの使い方が理解できた>ことから、<トリアージの方法について、自分が受けたことで知識が深まった>と考えていた。

カテゴリー【実際の災害の緊迫感の体験】は、7

つのコードから構成された。<実際の現場の緊迫した状況を学ぶことができた>と感じ、<実際に訓練を経験した方が理解が深まる>と考えていた。

カテゴリー【訓練体験から今後に生かせること】は、6つのコードから構成された。学生は、<訓練をすると焦らず行動できる>と理解し、<災害に対する意識の向上>がみられ、<訓練をしっかり行い想定しておくことが必要>であると考えていた。

カテゴリー【平時に何をすべきか】は、4つのカテゴリーから構成された。<平時にどんな行動をとるべきか考える>ことにより、<防寒着の準備><備蓄、気遣い><情報機器の準備>の必要性を理解していた。

3. 合同訓練参加前後の変化：単純集計の分析結果

住んでいる地域の自然災害に対する安全についての認識の変化を表2に示した。合同訓練参加前は「やや危険」と認識している学生が28名(48.3%)であったが、合同訓練後は35名(59.3%)に増加した。

ハザードマップの理解についての変化を表3に示した。合同訓練参加前は「(ハザードマップを)見て、災害に備えて、身のまわりの災害による危険箇所などを確認している」と回答した学生が17名(29.3%)であったが、合同訓練参加後は29名(49.2%)に増加した。

災害に備えた家族間の話し合いの内容についての変化を表4に示した。「非常用食料等の保管場所、使用方法」について話し合っている学生は、合同訓練参加前では14名(24.1%)であったが、合同訓練参加後では27名(45.8%)に増加した。「避難するタイミング・住んでいる地域の避難場所・避難経路の確認」について話し合っている学生は、合同訓練参加前では22名(37.9%)であったが、合同訓練参加後では25名(42.4%)に増加した。

災害への備え(すでに備えている、またはしたいと思っていること)についての変化を表5に示した。合同訓練参加前から参加後の変化として、「家具等の固定」と回答した学生は、26名(44.8%)から31名(52.5%)に増加、「携帯トイレ又は

表 1 合同訓練によって学んだこと：自由記載の分析結果

カテゴリー	コード
1	被災者の気持ちや不安に寄り添うそれぞれの職種の対応 心理的・精神的ケアで被災者が安心させられる 傷病者が不安にならないようにかかわることが大切 慣れない環境でのストレス どんな時に不安を感じるのかなと考えることができた 救助される側の気持ちになって考えられた しっかり相手の目を見て、傾聴してくれると理解しやすい
2	落ちついて行動することの大切さ 短時間の中でしっかりと被災者や現場を見て、適切な対応をすることが大切 安全で素早く行動することはいつでも多くの命を助けられると実感した 伝えられた情報を繰り返し確認する 一つひとつの動作を確認して、コミュニケーションをとること 救助された人の状態の変化がないか、確認することの重要性 被害状況を的確に把握して素早く対処していく必要性 自分自身や周囲の人の完全確保が大切 時間をかけずにスムーズな対応をしていくことの必要性 いざという時に冷静な判断ができる 素早く効率よく非難させることの大切さを学んだ 発災時にどのような対応をしているかを学べた
3	安心させる声かけが大切 声かけが必要 不安な思いを抱いている被災者にとって、声かけはとてうれしいものだ体験できた 端的でわかりやすい言葉で傷病者に声かけをする
4	災害時の看護について、イメージを持つことができた 看護職の役割を学んだ 安心させるための訴えの受容や適切なケア
5	情報共有していくことの大切さ 職種間の連携 たくさんの職種が連携しながら協力して対応していた 各組織が連携し、それぞれの役割を果たすことにより円滑な援助が行われる 消防や医療機関等との円滑な連携体制 組織で協働して備える 協力することが大事
6	トリアージの方法について、自分が受けたことで知識が深まった トリアージの際の質問や傷病者への声かけを学んだ トリアージは素早い判断が必要 トリアージの仕方を学んだ トリアージタグの書き方を学べた トリアージタグの使い方が理解できた トリアージについて学べた
7	災害の緊迫感を学んだ 実際の現場の緊迫した状況を学ぶことができた 訓練を行うことで実際の災害について、より深く考えることができる 視野を広くして、何をすべきか考えることが求められる 迅速に搬送している 実際に訓練を経験した方が理解が深まる 十分な知識と技術が求められる
8	普段から備え、それを周囲に広めることが大切 冷静に考えて、行動できるように日頃から災害に関心をもってほしい 定期的に訓練を行うことが必要 訓練をすると焦らず行動できる 災害に対する意識の向上 訓練をしっかり行い想定しておくことが必要
9	備蓄、気遣い 防寒着の準備 情報機器の準備 平時にどんな行動をとるべきか考える

表2 住んでいる地域の自然災害に対する安全についての認識

	参加前 (n=58)		参加後 (n=59)	
	n	%	n	%
安全	3	5.2	1	1.7
まあ安全	15	25.9	16	27.1
わからない	5	8.6	2	3.4
やや危険	28	48.3	35	59.3
危険	7	12.1	5	8.5

表3 ハザードマップの理解

	参加前 (n=58)		参加後 (n=59)	
	n	%	n	%
見て、災害に備えて、身のまわりの災害による危険箇所などを確認している	17	29.3	29	49.2
見たことはある	37	63.8	28	47.5
言葉は知っているが、見たことはない	2	3.4	2	3.4
全く知らない	2	3.4	0	0.0

表4 災害に備えた家族間の話し合いの内容（複数選択可）

	参加前 (n=58)		参加後 (n=59)	
	n	%	n	%
非常用食料等の保管場所、使用方法	14	24.1	27	45.8
避難するタイミング・住んでいる地域の避難場所・避難経路の確認	22	37.9	25	42.4
災害時の家族との安否確認・連絡方法	23	39.7	23	39.0
その他、災害発生時の行動、災害への備え等	10	17.2	11	18.6
無回答	0	0.0	3	5.1

凝固剤の備蓄」と回答した学生は24名(41.4%)から32名(54.2%)に増加した。一方、「飲料水や食料品の備蓄」は50名(86.2%)から47名(79.7%)に減少した。

災害に備えた準備(すでに準備している, またはしたいと思っていること)についての変化を表6に示した。合同訓練参加前から参加後の変化として, 「マッチ・ろうそく」と回答した学生は23名(39.7%)から30名(50.8%)に増加, 「防災ヘルメット 又は防災ずきん」と回答した学生は14名(24.1%)から18名(30.5%)に増加した。

一方, 「水」と回答した学生は51名(87.9%)から46名(78.0%)に減少, 「食品」と回答した学生は47名(81.0%)から44名(74.6%)に減少した。

飲料水と食料品の備蓄について表7に示した。合同訓練参加前から参加後の変化として, 飲料水の備蓄については「準備なし」と回答した学生は16名(27.6%)から, 14名(23.7%)に減少し, 食料品の備蓄については「準備なし」と回答した学生は22名(37.9%)から, 14名(23.7%)に減少した。

表5 災害への備え(すでに備えている, またはしたいと思っていること)(複数選択可)

	参加前 (n=58)		参加後 (n=59)	
	n	%	n	%
家具等の固定	26	44.8	31	52.5
飲料水や食料品の備蓄	50	86.2	47	79.7
携帯トイレ又は凝固剤の備蓄	24	41.4	32	54.2
無回答	0	0.0	3	5.1

表6 災害に備えた準備(すでに準備している, またはしたいと思っていること)(複数選択可)

	参加前 (n=58)		参加後 (n=59)	
	n	%	n	%
水	51	87.9	46	78.0
食品	47	81.0	44	74.6
使い捨てカイロ	30	51.7	32	54.2
防災ヘルメット 又は防災ずきん	14	24.1	18	30.5
懐中電灯	38	65.5	36	61.0
携帯ラジオ	22	37.9	25	42.4
予備電池・ 携帯充電器	43	74.1	44	74.6
マッチ・ろうそく	23	39.7	30	50.8
その他	4	6.9	6	10.2
無回答	0	0.0	3	5.1

表7 飲料水や食料品の備蓄

【飲料水の備蓄】				
	参加前 (n=58)		参加後 (n=59)	
	n	%	n	%
準備なし	16	27.6	14	23.7
1～2日分	20	34.5	21	35.6
3日分	12	20.7	13	22.0
4～6日	4	6.9	2	3.4
7日以上	6	10.3	5	8.5
無回答	0	0.0	5	8.5

【食料品の備蓄】				
	参加前 (n=58)		参加後 (n=59)	
	n	%	n	%
準備なし	22	37.9	14	23.7
1～2日分	17	29.3	19	32.2
3日分	13	22.4	14	23.7
4～6日	5	8.6	5	8.5
7日以上	1	1.7	2	3.4
無回答	0	0.0	5	8.5

IV. 考察

1. 合同訓練によって学んだこと：自由記載の分析結果の考察

先行研究において、消防、レスキュー隊、自衛隊等による総合防災訓練に、看護学生が参加したことによる学びとして、被災者の心理、多職種連携、適切なトリアージ能力、看護師のコミュニケーション能力が報告されている⁸⁾。また、災害訓練やメディカルラリー見学を通しての看護学生の学びとして、被災者と地域住民への配慮の重要性や緊急場面で必要な多職種間の連携等が示されている⁹⁾。本研究においても同様の結果が得られたため、災害看護学教育において、専門家が実施する訓練を通じた体験が、災害発生時における多職種

連携やコミュニケーション能力の重要性を理解するために有効であるというエビデンスを補強できた。一方で、実際の災害の緊迫感の体験は、本研究結果において特徴的であった。先行研究での、地震を想定した防災訓練において一部の学生が訓練誘導および負傷者役を担った事例⁸⁾、避難所となる中学校体育館に設置されたブースへの参加を通じた事例⁹⁾は、訓練環境や関与する職種が限定されたものであった。これに対し、本研究で参加した合同訓練は、1都8県の消防隊に加えて警察、自衛隊、山梨DMATが参加し、山中湖周辺エリアにおいて事故車両や家屋を用いた模擬災害現場が設定され、学生全員が傷病者役を体験した。このように、訓練の規模、参加主体の多様性、現場

環境のリアリティが高かったことから、学生は実際の災害に近い状況下に置かれ、災害に伴う緊迫感を体験できたと考えられる。災害の現場では、災害救援者は高度なストレスや情緒の負担に直面することが示されている¹⁰⁾。看護学生が合同訓練を通して緊迫感を体験したことにより、災害現場においては感情をコントロールし冷静に対応することの重要性を理解することにつながった可能性がある。

2. 合同訓練によって学んだこと：単純集計の結果の考察

合同訓練の参加が看護学生の自然災害に対する認識や準備についての変化がみられた。まず、災害の危険性に対する認識が増加した。合同訓練参加後、住んでいる地域の自然災害のリスクについて「やや危険」という認識を持つ学生の割合が増加したことが示された。これは、訓練を通じて実際の災害状況やその深刻さを学び、自身や他者の安全を確保する必要性を理解した結果と考える。

次に、ハザードマップの理解に関する変化があった。合同訓練参加後、「ハザードマップを見て、災害に備えて、身のまわりの災害による危険箇所などを確認している」と回答した学生の割合が増加した。これは、合同訓練において地震発生に伴う災害を疑似的に体験したことによって、住み慣れた場所のリスクを把握したため、地域の脆弱性を把握する意識が高まりハザードマップの重要性を理解したことが示唆される。

また、災害に備えた家族間の話し合いに関する変化もみられた。合同訓練参加後、「非常用食料等の保管場所、使用方法」と「避難するタイミング・避難場所・避難経路の確認」について話し合っている学生の割合が増加した。これは、合同訓練参加を通じて、災害によって家族や地域社会との連絡手段が断たれること理解できたため、家族との連携を強化し、災害時の行動計画を事前に話し合うことの重要性が認識されたことを示している。

災害への備えや準備に関する変化については、合同訓練参加後、「家具等の固定」や「携帯トイ

レ又は凝固剤の備蓄」といった対策に対する意識が高まりがみられた。しかし、「飲料水や食料品の備蓄」に関する意識はやや低下していた。これは、合同訓練が地震の発生を想定し各機関が連携して傷病者を救出・搬送する訓練を中心としていたため、地震による家屋の倒壊による被害が強く印象に残った可能性が考えられる。

飲料水と食料品の備蓄に関する変化については、合同訓練後、「準備なし」と回答した学生の割合が減少した。これは、訓練を通じて具体的な備蓄の必要性を理解し、行動に移す意欲に変化があったことを示している。

本研究の単純集計の結果は、合同訓練が看護学生の自然災害に対する認識や準備に変化が認められた。松清の研究によると、看護学生は災害時の役割意識は高いが、自身の防災行動は伴っていないことが報告されており、看護学生の防災行動は地域行事への参加意思、居住地域への愛着等が関連要因であることが示されている⁶⁾。合同訓練参加により地域の関係職種と関わりをもったこと、地域の災害を疑似的に体験したことが、自身の防災意識や防災行動に影響を与えたと考える。災害看護学教育では、居住地域への愛着および地域の災害特性を考慮し教育に活かすことにより看護学生の防災意識および防災行動が向上することが示唆されている⁷⁾。看護学生の防災意識や防災行動を向上させるために、災害看護学の授業の中で、合同訓練のような地域の関係職種および地域住民との交流を通じた活動を体験できる機会を設けることが望まれる。

本研究の限界

本研究は、交絡要因を検討できていない。したがって、学生の基本属性や個人的な経験が、結果に影響を与えた可能性が考えられる。次に、限定された集団を対象としているため、この結果を一般化することは難しい。また、サンプルサイズが小さいこと、対応のある2値以上の名義尺度というデータの特性上、有意差の検定を実施することが困難であったため、結果の統計的妥当性を十分に検証することができなかった。この点は本研究

の限界として考慮する必要がある。

V. 結論

本研究により、消防・警察・自衛隊・DMAT等が参加する大規模な合同訓練への参加は、看護学生において、被災者理解や多職種連携、災害時の看護師の役割に関する学びを深めるとともに、居住地域の災害リスク認識や防災に関する意識に変化をもたらしたことが示された。

VI. 謝辞

本研究にご協力いただいた学生の皆様に感謝申し上げます。

VII. 文献

- 1) 福地龍郎, 窪田有記: 山梨県で発生する地震の特性. 山梨大学教育学部紀要 Vol.33, 119-138, 2022.
- 2) 山梨県地震被害想定調査結果 (2023年5月26日発表). https://www.pref.yamanashi.jp/bousai/jishinnhigaisoutei/jishinnhigai_sotei_r5.html (2024年3月15日)
- 3) 菊本統, 下野勘智, 伊藤和也, 大里重人, 稲垣秀輝, 日下部治: 我が国の自然災害に対する統合的リスク指標. 土木学会論文集 Vol.73, No.1, 43-57, 2017
- 4) 鈴木猛康: 山梨県の豪雪災害—その教訓は活かされるか—. 京都大学防災研究所年報 Vol.58, 16-23, 2015.
- 5) 山梨県 2023年度 高齢者福祉基礎調査 資料編 (2023年4月1日現在). https://www.pref.yamanashi.jp/documents/109773/r5_kourei_kisochousa_siryou.pdf (2024年3月15日)
- 6) 松清由美子, 野村志保子, 森本紀巳子: 看護学生の防災意識とその影響要因. 日本災害看護学会誌 Vol.10, No.3, 36-49, 2009.
- 7) 松清由美子: 災害特性の異なる地域で生活する看護学生の防災意識および防災行動の相違. 日本医学看護学教育学会誌 Vol.21, 39-44, 2012.
- 8) 政時和美, 村田節子, 松井聡子, 中井裕子: 総合防災訓練に参加した学生の学習意欲と学び. 福岡県立大学看護学研究紀要 Vol.14, 49-57, 2017.
- 9) 中村有美子, 藤井可苗, 菅野夏子, 小野 ツルコ: 災害訓練への参加を通しての看護学生の災害看護についての学び. ヒューマンケア研究学会誌 Vol.5, No.1, 55-60, 2013.
- 10) 庄司正枝, 叶谷由佳, 本多由起子: 東日本大震災で被災した災害救援者の経時的ストレス反応. 日本看護研究学会雑誌 Vol.42, No.1, 123-133, 2019.